

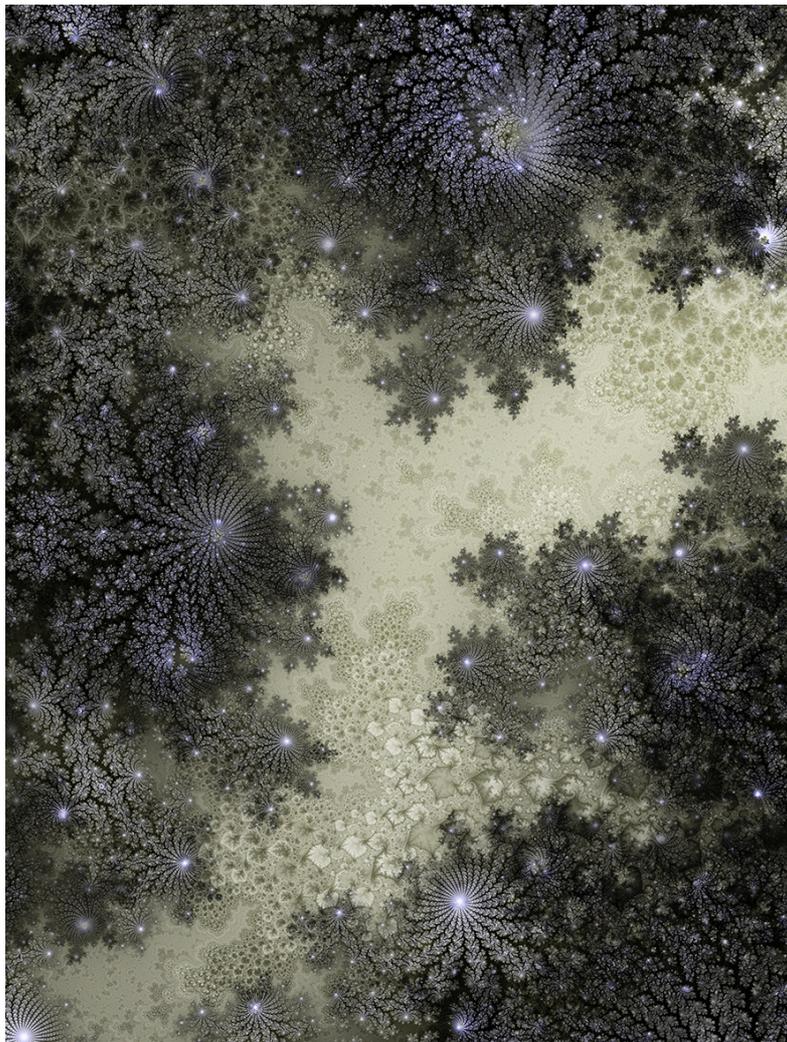
PRESS RELEASE

ギャラリー小柳 展覧会のご案内

**Gallery selection**

トーマス・ルフ、ハイム・スタインバック、杉本博司、橋本晶子

2023.7.5 (Wed) – 8.26 (Sat)



Thomas Ruff, *d.o.pe.07 III*, 2022

報道関係者各位

平素よりお世話になっております。

この度ギャラリー小柳では、2023年7月5日（水）から8月26日（土）の会期にて Gallery selection 展を開催いたします。本展では、国内初公開となるトーマス・ルフの最新シリーズである、工業用カーペットに「フラクタル」をプリントした「d.o.pe.」、ハイム・スタインバックのドガのミニチュアの彫刻を用いた《Spanish dancer》、杉本博司のプリズムで分光された光を撮影した「OPTICKS」、そして橋本晶子の鉛筆画を家具の中に再構成した作品《Seaside》を展覧いたします。

ドイツのデュッセルドルフ芸術アカデミーにてベッヒャー夫婦のもとで写真を学んだトーマス・ルフは、写真の持つ特性を追求した様々なシリーズを展開し、写真に対する既成概念への問いかけを続けてきました。以前から数学の美しさを視覚的に表現する試みのもとに数式を用いた作品を展開してきたルフは、今回のシリーズでは「フラクタル」という、縮尺を変えても同じ形が続いていく幾何学構造に着目しています。雪の結晶のように自然界に現れるその幾何学構造を、最新のソフトウェアを駆使して三次元の仮想空間において人工的に作り出しました。本作はこれまでの写真作品とは異なり、その模様を新たな支持体である工業用カーペットに刷り込むことで、カーペットの毛足による深みと柔らかな質感をもたらしました。1960年代のサイケデリック・アートを彷彿とさせる本作のシリーズは、オルダス・ハクスリーの著書『The Doors of Perception』(1954)に基づき「d.o.pe.」と名付けられています。さらにルフは、ヒエロニムス・ボスやマティアス・グリュネヴァルトのような北方ルネサンスの芸術家たちの鮮やかな色彩と不穏で幻想的な世界観を思い起こさせることで、芸術の創造力に限りはないことを示唆しています。

ニューヨークを拠点に活動するハイム・スタインバックは、「フレーミングデバイス」と呼ぶ90度、50度、40度の角度に定めた三角形を底面とする三角柱状の棚をさまざまな色に加工し、その上に収集したオブジェクトや日用品を整然と並べるインスタレーションで知られています。部屋いっぱいに設置されたインスタレーションには、しばしば漫画や雑誌、広告等から引用したテキストを壁面に貼り、オブジェクトに新たな文脈を提示しています。今回ギャラリー小柳では、普段の作風とは異なる、壁掛けの木製の箱の中にエドガー・ドガによる彫刻《Spanish dancer》の縮小された複製品を取めた作品を展示いたします。美術館の記念品としてフェイクブロンズで作られたその小像は、アンティーク調の椅子の上に乗せられています。スタインバックは本作についてこのように述べています。「ガラスの棚に乗せられた踊り子は、まるで重力に抗うようで、落とされた影はより一層奥行きを深めています。」

杉本博司の「OPTICKS」シリーズは、アイザック・ニュートンのプリズム実験の再現から始まり、杉本が研究と検証を重ね、15年間かけて完成させたものです。1704年に出版されたニュートンの『光学（OPTICKS）』により、白色だと思われていた太陽光が、プリズムによって赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の複数の色から構成されていることが発見されました。杉本は、ニュートンが発明した観測装置を改良し、プリズムを通して分光させた色そのものをポラロイドカメラで撮影しています。本シリーズでは、色と色の隙間に立ち現れる無限の階調を写したポラロイドを、「色の中に溶け込むことができる」ほどの大判プリント作品に仕上げています。

2021年にギャラリー小柳にて個展を開催した橋本晶子は、細密な鉛筆画を中心に構成したインスタレーションを発表してきました。展示空間に注ぐ光とそれによって作られる影を取り込み、時間や人の移動によって変化する展示空間を作品として見せる自身の手法を「風景をつくる」と表現しています。今回発表する作品では、昨年開催した二人展「Other Rooms」にて展示した作品の一部を、自ら制作した木製の棚の中に収めました。ガラス板に仕切られた棚の中では、透明なスプーンやグラスにかすかな影がゆらめき、奥に添えられた鉛筆画は「遠く」を覗かせます。

資料および図版のご依頼は担当者までご連絡ください。

ご掲載際にはご一報いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

ギャラリー小柳

## d.o.pe.

数学者のブノワ・マンデルブロが1975年に提唱した「フラクタル」という幾何学構造の視覚的な外観に、トーマス・ルフは2000年代初頭から着目していました。フラクタルとは、高い自己相似性を持った「自然に」現れる物体、構造、パターンのことで、パターンの一部を拡大すると、同じ構造が何度も見られるものです。これをコンピュータで作成しようとした最初の試みは、当時のプログラムでは精密さが再現できずに失敗に終わりました。

新しいソフトウェアを使うことで、ルフは再びフラクタルの生成に挑戦することができるようになりました。ルフが特に興味を持ったのは二つの側面でした。一つ目は、フラクタルの世界に飛び込むと見えてくる数学の視覚的な美しさを可視化することと、二つ目は、自然に見えるけれど完全に人工的に作られた画像を作り出す可能性です。初めに、マンデルブロ集合\*の断片のさまざまな画像を作成し、それを重ね合わせ、サイケデリックで擬似的な自然を作り出しました。彼は、深みと天然のような柔らかな質感を持たせるために、完成したモチーフをベロア製のカーペットに刷り、タペストリーとして壁面に展示しています。

「d.o.pe.」シリーズで、ルフは「cycles」シリーズ以降再び数学の世界に没入し、複雑な数式やアルゴリズムの視覚美を追求しています。「cycles」が線形代数分野の数式の視覚化だとすれば、「d.o.pe.」の根底にあるフラクタルパターンはユークリッド幾何学の延長線上にあるといえます。フラクタルの自己相似構造は、自然界では雪の結晶の構造のように単純な形で現れますが、2次元と3次元両方の仮想空間においてデジタル画像として作ることもできます。フラクタルが自然でありながら人工的な構造を持っているという繋がりは、人間の知覚に関するルフの継続的な研究をより強いものにししました。現実とは何か？目の前にある世界なのか、それとも構築された仮想現実なのか。そして、もし現実と創られた虚構が区別できないとしたら…？

同時にフラクタルは、ルフが青年期にポスターやレコードジャケットを通して出会った、1960年代から70年代のサイケデリック・アートを思い起こさせました。サイケデリック・アートは、LSDやメスカリンといった意識を拡張する薬物を使用した際に起こる視覚情報に似た、色彩豊かな花柄や曼荼羅、万華鏡などの模様で装飾されていました。スタンリー・キューブリック監督の映画『2001年宇宙の旅』（1968年）のシーケンスのように、幻覚剤がもたらすイメージは、強烈に知覚に挑みます。これらのイメージは、常識的な想像力を超えています。しかし、「現実」として認識されており、本シリーズのタイトルはこの繋がりを仄めかしています。

「d.o.pe.」シリーズは、オルガス・ハクスリーが、自身のメスカリンの体験について報告した自伝的エッセイ『知覚の扉』（1954年）の邦題に基づいています。ハクスリーは著書の中で、意識を拡張する薬物がどのように人の知覚の変化を引き起こし、視野を広げるかを詳述しています。

本シリーズの詩的サブタイトル「Colours of Chloë」は、ルフの着想の原典を暗に示しています。ギリシャ神話の女神クロエ（またはデメテル）は、肥沃な大地と豊かな自然を司る存在でした。仮想現実で造られたd.o.pe.は、鮮やかな色彩と多様なイメージでその恵み豊かな自然を模倣しています。また、ヒエロニムス・ボスやマティアス・グリュネヴァルトといった北方ルネサンスの画家たちが描いた、非現実的な鮮やかな色彩と不穏で幻想的な世界を基にしています。特にボスの三連画《快樂の園》（1490年-1505年頃）の斬新な建造物とシニールで豊かな人物像は、長らくルフを魅了してきました。ルフにとってこれらの作品は、芸術の想像力に限りはないことを示唆するものなのです。

\*マンデルブロ集合：単純な関数の反復から導かれるフラクタル構造

Valeria Liebermann

ヴァレリア・リーバーマン (インディペンデント・キュレーター)

【広報用図版】

ご使用の際は、下記キャプションとクレジットラインを表記いただくようお願いいたします。  
下記ご承知おきの上ご使用くださいますようお願いいたします。

- ・ 図版のトリミング不可
  - ・ 図版への文字載せ不可
  - ・ 図版の二次使用禁止、ご使用後は速やかにデータを破棄してください。
- 



[キャプション]

Thomas Ruff

*d.o.pe. 07 III*

2022

Colaris on velour carpet

[クレジットライン]

© Thomas Ruff / Courtesy of Gallery Koyanagi



[キャプション]

Haim Steinbach

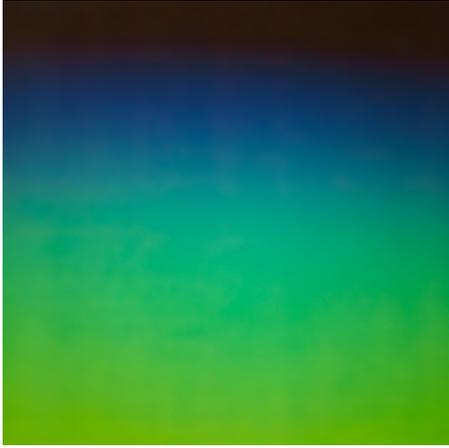
*Spanish dancer*

2011

Wood, plastic laminate and glass box; wood stool; painted bronze Degas statuette

[クレジットライン]

Courtesy the artist and Tanya Bonakdar Gallery, New York / Los Angeles



[キャプション]

Hiroshi Sugimoto

*OPTICKS 016*

2018

chromogenic print

[クレジットライン]

© Hiroshi Sugimoto / Courtesy of Gallery

Koyanagi

【展覧会概要】

展覧会名：Gallery selection | トーマス・ルフ、ハイム・スタインバック、杉本博司、橋本晶子

会期：2023年7月5日（水）－8月26日（土）

開廊時間：12:00 – 19:00

休廊日：日／月／祝祭日

\*下記の期間は休廊致します。

2023年7月18日（火）－7月22日（土）、2023年8月11日（金）－8月16日（水）

会場：ギャラリー小柳

東京都中央区銀座1-7-5 小柳ビル9F

Tel: 03-3561-1896 Fax: 03-3563-3236

アクセス：

東京メトロ有楽町線 銀座一丁目駅7番出口より徒歩1分

東京メトロ丸ノ内線・銀座線・日比谷線 銀座駅A-9番出口より徒歩5分

お問い合わせ：ギャラリー小柳

Tel: 03-3561-1896

Mail: [mail@gallerykoyanagi.com](mailto:mail@gallerykoyanagi.com)

<http://www.gallerykoyanagi.com>

## トーマス・ルフ

1958年ドイツ、ツェル・アム・ハルマースバッハ生まれ。

1977年から85年までデュッセルドルフ芸術アカデミーでベルント&ヒラ・ベッヒャー夫妻のもとで写真を学び、ドイツ人家庭の典型的な室内風景を撮影した「Interieurs」シリーズを皮切りに、友人たちの肖像を巨大なサイズに引き伸ばした「Porträts」で大きな注目を集める。以来、建築、都市風景、ヌード、天体などさまざまなテーマで作品を制作し、明確なコンセプトに基づいたシリーズとして展開。

1990年代以降は写真作品にデジタル処理を導入するとともに、インターネット上に氾濫する画像にマニピュレーションを加えた「nudes」「jpeg」といったシリーズ、また探査機がとらえた土星や火星などの天文写真に加工を施す「cassini」「ma.r.s.」など、他者が撮影した写真を素材としてイメージそのものの再構築を試みるなど、一貫して写真というメディアの特性である情報性と表現性への検証を通じ、写真に対する既存概念への問いかけを続ける。

展覧会ではドクメンタ9（1992年）、ヴェネツィア・ビエンナーレ（1995年）など国際展への参加をはじめ、2001年から04年にかけてヨーロッパを巡回した回顧展や2012年のハウス・デア・クンスト（ミュンヘン）での大規模な個展を開催するなど、現代ドイツを代表する写真家として活躍する。2016年には東京国立近代美術館にて日本の美術館での初個展を開催、同展は金沢21世紀美術館に巡回した。2020年から21年にかけては、ノルトライン＝ヴェストファーレン州立美術館K20（デュッセルドルフ）にて個展を開催し、同年に大規模な個展を国立台湾美術館にて開催した。

## ハイム・スタインバック

1944年イスラエル、レホボト生まれ、1957年より米国在住。

1968年にプラット・インスティテュートにてBFAを取得し、1973年にコネチカット州のイエール大学にてMFAを取得した。主要な展示としては、1992年ヤン・フートがキュレーションしたドクメンタIX（カッセル）において紹介され、1997年のヴェネツィア・ビエンナーレでは、ジェルマーノ・チェラントが総合キュレーターを務めた第47回国際美術展にて作品が展示された。2013年には、ニューヨークのバード・カレッジにあるヘッセル美術館にて、1970年代後半からのサイトスペシフィックなインスタレーションである「Displays」の大規模な展覧会が開催された。この展覧会は「once again the world is flat」と題され、チューリッヒのクンストハーレとロンドンのサーペンタイン・ギャラリーに巡回。2018年、ミュージアムクアハウスクレーフェにて個展「every single day」を開催し、イタリアの南チロルのボルツァーノ近現代美術館 Museion に巡回。同年には、イスラエルのヤッフアにある Magasin III の設立記念展「zerubbabel」を開催した。

杉本博司

---

1948年東京生まれ。1970年に渡米、1974年よりニューヨーク在住。

活動分野は写真、建築、造園、彫刻、執筆、古美術蒐集、舞台芸術、書、作陶、料理と多岐にわたり、世界のアートシーンにおいて地位を確立してきた。杉本のアートは歴史と存在の一過性をテーマとし、そこには経験主義と形而上学の知見をもって西洋と東洋との狭間に観念の橋渡しをしようとする意図があり、時間の性質、人間の知覚、意識の起源、といったテーマを探求している。作品は、メトロポリタン美術館（ニューヨーク）やポンピドゥセンター（パリ）など世界有数の美術館に収蔵。代表作に『海景』、『劇場』、『建築』シリーズなど。

2008年に建築設計事務所「新素材研究所」を設立、MOA美術館改装（2017年）、青春芸術村ゲストハウス「和心」（2019年）などを手掛ける。2009年に公益財団法人小田原文化財団を設立。2017年10月には構想から20年の歳月をかけ建設された文化施設「小田原文化財団 江之浦測候所」をオープン。伝統芸能に対する造詣も深く、演出を手掛けた『杉本文楽 曾根崎心中』公演は海外でも高い評価を受ける。2019年秋には演出を手掛けた『At the Hawk's Well（鷹の井戸）』をパリ・オペラ座にて上演。主な著書に『苔のむすまで』、『現な像』、『アートの起源』、『空間感』、『趣味と芸術—謎の割烹味占郷』、『江之浦奇譚』、最新刊に『杉本博司自伝 影老日記』。1988年毎日芸術賞、2001年ハッセルブラッド国際写真賞、2009年高松宮殿下記念世界文化賞（絵画部門）受賞。2010年秋の紫綬褒章受章。2013年フランス芸術文化勲章オフィシエ受勲。2017年文化功労者。2023年日本芸術院会員に任命。

橋本晶子

---

1988年生まれ、東京在住。

2015年に武蔵野美術大学修士課程修了。膨大な作業量によって描かれた鉛筆画を空間に配したインスタレーションを展開する。2019年にはパリのレジデンス施設「Cité internationale des arts」の自身の居住スペースにて個展「Will it rain?」を開催。2020年には資生堂が企画する公募展「第14回 shiseido art egg」に選出され、資生堂ギャラリーにて展覧会「Ask him」を開催し、shiseido art egg賞を受賞。2021年にギャラリー小柳にて個展「I saw it, it was yours.」を開催。翌年には青森公立大学 国際芸術センター青森（ACAC）のアーティスト・イン・レジデンス プログラム 2022 “Making Things”に参加し、個展「影を誘う」を開催した。

## トーマス・ルフ

- 1958 ドイツ、ツェル・アム・ハルマースバッハ生まれ。  
 1977-1985 デュッセルドルフ美術アカデミー卒業  
 デュッセルドルフ在住

## 主な個展

- 2022 Thomas Ruff: Méta-Photographie, Musée d'art moderne et contemporain de Saint-Étienne Métropole (MAMC), France
- 2021 Thomas Ruff: after.images – Works 1989-2020, National Taiwan Museum of Fine Arts, Taichung
- 2020 Thomas Ruff, K20 - Kunstsammlung Nordrhein-Westfalen, Düsseldorf
- 2017 Thomas Ruff, Whitechapel Gallery, London
- 2016 「トーマス・ルフ」東京国立近代美術館（東京）／金沢 21 世紀美術館（金沢）  
 Thomas Ruff: Object Relations, Art Gallery of Ontario, Toronto
- 2014 Inbox: Thomas Ruff, The Museum of Modern Art, New York  
 Thomas Ruff: Lichten, Stedelijk Museum voor Actuele Kunst (S.M.A.K.), Ghent / Kunsthalle Düsseldorf  
 「トーマス・ルフ：ma.r.s. and negatives」ギャラリー小柳（東京）  
 「トーマス・ルフ：photograms」TOLOT/heuristic SHINONOME（東京）
- 2012 Thomas Ruff, Haus der Kunst, Munich
- 2011 Thomas Ruff: ma.r.s., Centro de Arte Contemporáneo de Málaga, Spain  
 Thomas Ruff: Stellar Landscapes, LWL-Landesmuseum für Kunst und Kulturgeschichte, Münster
- 2009 「トーマス・ルフ：cassini + cycles」ギャラリー小柳（東京）  
 Thomas Ruff: Schwarzwald.Landschaft, Museum für Neue Kunst, Freiburg, Germany  
 Thomas Ruff: Surfaces, Depths, Kunsthalle Wien, Vienna  
 Thomas Ruff, Castello di Rivoli - Museo d'Arte Contemporanea, Turin
- 2008 Thomas Ruff: A Retrospective, Múcsarnok Kunsthalle, Budapest
- 2007 Thomas Ruff: Jpegs, Moderna Museet, Stockholm  
 Thomas Ruff: The Sprengel Project, Sprengel Museum, Hanover
- 2004 Thomas Ruff: Les Oeuvres de la Collection Pierre Huber, Musée d'Art Moderne et Contemporain, Geneva
- 2002 Thomas Ruff: Identificaciones, Museo Tamayo Arte Contemporáneo, Mexico City  
 「トーマス・ルフ：Substrate」ギャラリー小柳（東京）
- 2001-2004 Thomas Ruff: Photographs 1979 to Present, Staatliche Kunsthalle Baden-Baden, Germany / Museet for Samtidskunst, Oslo / Museum Folkwang, Essen, Germany / Städtische Galerie im Lenbachhaus, Munich / Irish Museum of Modern Art, Dublin / Artium Centro-Museo Vasco de Arte Contemporáneo, Vitoria Gasteiz, Spain / Museu Serralves, Porto, Portugal / Tate Liverpool, England / Centre for Contemporary Art Ujazdowski Castle, Warsaw
- 1998 「トーマス・ルフ」ギャラリー小柳（東京）

## ハイム・スタインバック

- 1944 イスラエル、レホボト生まれ  
 1962-68 ニューヨーク、ブルックリン在住  
 1965-66 プラット・インスティテュート卒業  
 エクス=マルセイユ大学修了  
 1971-73 イェール大学修了

主な展覧会

- 2023 Jacob's ladder, Dvir Gallery, Tel Aviv  
 2021 Haim Steinbach: 1991-1993, Tanya Bonakdar Gallery, New York  
 2019 every single day, Museion Bolzano, Bolzano, Italy  
 2018 every single day, Museum Kurhaus Kleve, Germany  
 zerubbabel, Magasin III, Jaffa, Israel  
 2014 fresh: Haim Steinbach and Objects from the Permanent Collection, The Menil Collection,  
 Houston, TX  
 2013 Haim Steinbach: once again the world is flat, curated by Tom Eccles, Hessel Museum of Art,  
 Bard College, Annandale-on-Hudson, NY/ Kunsthalle Zurich, Switzerland/ Serpentine Gallery,  
 London  
 Museum fur Kunst, National Gallery of Denmark, Copenhagen  
 2005 Matrix, Berkeley Art Museum, University of California, Berkeley, CA  
 1997 Museum Moderner Kunst Stiftung Ludwig, Vienna  
 XLVII Esposizione Internazionale D'Arte, curated by Germano Celant, Venice Biennale, Italy  
 1995 Castello di Rivoli Museo d'Arte Contemporanea, Rivoli/ Turin, Italy  
 1994 Ritter Kunsthalle, Klagenfurt, Austria  
 1992 no rocks allowed, Witte de With, Centre for Contemporary Art, Rotterdam, The Netherlands  
 Documenta IX, Kassel, Germany, curated by Jan Hoet, Pier Luigi Tazzi, and Dennys Zacharopoulos  
 1988 CAPC Musee d'art contemporain, Bordeaux, France

## 杉本博司

- 1948 東京生まれ  
 1970 立教大学経済学部卒業  
 1974 アートセンター・カレッジ・オブ・デザイン卒業  
 1974- ニューヨーク在住

## 主な個展

- 2022 特別展 春日若宮式年造替奉祝「杉本博司ー 春日神霊の御生 御蓋山そして江之浦」  
 春日大社国宝殿 (奈良)  
 「杉本博司 本歌取りー日本文化の伝承と飛翔」姫路市立美術館 (兵庫)  
 「OPERA HOUSE」ギャラリー小柳 (東京)  
 「春日神霊の旅ー杉本博司 常陸から大和へ」神奈川県立金沢文庫 (神奈川)
- 2021 「OPTICKS」ギャラリー小柳 (東京)
- 2020 「飄々表具ー杉本博司の表具表現世界ー」細見美術館 (京都)  
 「杉本博司 瑠璃の浄土」東山キューブ、京都市京セラ美術館 (京都)  
 「Past Presence」ギャラリー小柳 (東京)
- 2018 「クアトロ・ラガッツィ 桃山の夢とまぼろしー杉本博司と天正少年使節が見たヨーロッパ」  
 長崎県美術館 (長崎)  
 「SUGIMOTO VERSAILLES Surface of Revolution」トリアノン、ヴェルサイユ宮殿  
 (フランス)  
 「信長とクアトロ・ラガッツィ 桃山の夢と幻 + 杉本博司と天正少年使節が見たヨーロッパ」MOA 美術館 (静岡)  
 「杉本博司: Still Life」ベルギー王立美術館 (ブリュッセル、ベルギー)
- 2017 「杉本博司: 天国の扉」ジャパン・ソサエティ (ニューヨーク)  
 「LE NOTTI BIANCHE」サンドレット・レ・レバウデンゴ財団現代美術館 (トリノ、イタリア)
- 2016 「杉本博司 ロスト・ヒューマン」東京都写真美術館 (東京)
- 2015 「趣味と芸術ー味占郷」千葉市美術館 (千葉) / 細見美術館 (京都/\*2016)  
 「今昔三部作」千葉市美術館 (千葉) / モスクワ・マルチメディア美術館 (ロシア/\*2016)  
 / Musée des Beaux-Arts, Le Locle (ヌーシャテル、スイス/\*2016)
- 2014 「ON THE BEACH」ギャラリー小柳 (東京)  
 「ロスト・ヒューマン・ジェネティック・アーカイブ」パレ・ド・トーキョー  
 (パリ、フランス)  
 「杉本博司: Past Tense」The J. Paul Getty Museum (ロサンゼルス、アメリカ)
- 2013 「杉本博司」サムスン美術館リウム (ソウル、韓国)
- 2012 「Five Elements」ギャラリー小柳 (東京)  
 「杉本博司 ハダカから被服へ」原美術館 (東京)
- 2011 「杉本博司 アートの起源 | 建築」丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 (香川)
- 2009 「杉本博司ー光の自然」IZU PHOTO MUSEUM (静岡)  
 「放電場」ギャラリー小柳 (東京)
- 2008 「歴史の歴史」金沢 21 世紀美術館 (石川) / 国立国際美術館 (大阪/\*2009)
- 2007 「漏光」ギャラリー小柳 (東京)  
 「杉本博司」K20 ノルトライン=ヴェストファーレン州立美術館 (デュッセルドルフ、ドイツ) / ノイエ・ナショナルギャラリー (ベルリン、ドイツ/\*2008)
- 2006 「本歌取り」ギャラリー小柳 (東京)  
 「観念の形 数理模型」アトリエ・ブランクーシ、ポンピドゥー・センター

- (パリ、フランス)
- 2005 「歴史の歴史」 ジャパン・ソサエティー・ギャラリー (ニューヨーク、アメリカ)  
「杉本博司：時間の終わり」 森美術館 (東京) / ハーシュホーン博物館と彫刻の庭 (ワシントン D.C、アメリカ/\*2006)
- 2004 「大ガラスが与えられたとせよ」 カルティエ現代美術財団 (パリ、フランス)
- 2003 「杉本博司」 サーペンタイン・ギャラリーズ (ロンドン、イギリス)  
「杉本博司：歴史の歴史」 メゾンエルメス フォーラム (東京)  
「ARCHITECTURE」 ギャラリー小柳 (東京)  
「杉本博司：建築」 シカゴ現代美術館 (イリノイ州、アメリカ)
- 2001 「杉本博司：時の建築」 ブレゲンツ美術館 (オーストリア)  
「Portraits」 ギャラリー小柳 (東京)
- 2000 「杉本博司」 ルフィーノ・タマヨ美術館 (メキシコシティ、メキシコ)  
「杉本博司：建築シリーズ」 サンフランシスコ近代美術館 (カリフォルニア州、アメリカ)  
「杉本博司：ポートレート」 ドイツ・グッゲンハイム美術館 (ベルリン、ドイツ) /  
ビルバオ・グッゲンハイム美術館 (ビルバオ、スペイン)
- 1999 「陰翳礼讃」 ギャラリー小柳 (東京)
- 1998 「モダニズム」 ギャラリー小柳 (東京)
- 1997 「Twice as Infinity」 ギャラリー小柳 (東京)
- 1996 「杉本博司：写真」 ストックホルム近代美術館 (スウェーデン)  
「Motion Picture」 ギャラリー小柳 (東京)
- 1995 「Still Life」 ギャラリー小柳 (東京)  
「杉本博司」 メトロポリタン美術館 (ニューヨーク、アメリカ) / ヒューストン・コンテン  
ポラリー・アート・美術館 (ヒューストン、アメリカ/\*1996) / ハラ ミュージアム アー  
ク (群馬/\*1996) / アクロン美術館 (オハイオ州、アメリカ/\*1997)  
「杉本博司：Time Exposed」 クンストハレ・バーゼル (スイス)
- 1994 「杉本博司」 ロサンゼルス現代美術館 (カリフォルニア州、アメリカ)
- 1992 「杉本博司：Time Exposed」 CAPC ボルドー現代美術館 (フランス)
- 1991 「杉本博司：Time Exposed」 佐賀町エキジビット・スペース / 佐賀町 BIS、IBM 箱崎ビル  
前庭 (東京)
- 1989 「近作展 6—杉本博司」 国立国際美術館 (大阪)
- 1988 「杉本博司」 佐賀町エキジビット・スペース / ツァイト・フォト・サロン (東京)  
「杉本博司：ジオラマ、劇場、海景」 ソナバンド・ギャラリー (ニューヨーク、アメリカ)
- 1977 「杉本博司」 南画廊 (東京)

橋本品子

---

1988 年生まれ

2009-2013 武蔵野美術大学造形学部日本画学科

2013-2015 武蔵野美術大学大学院造形研究科修士課程美術専攻日本画コース

2021- 武蔵野美術大学非常勤講師

#### 主な展覧会

- 2022 「影を誘う」国際芸術センター青森（東京）  
「Other Rooms」ワンルーム（東京）
- 2021 「I saw it, it was yours.」ギャラリー小柳（東京）
- 2020 「Ask him」資生堂ギャラリー（東京）
- 2019 「Will it rain?」Cité internationale des arts（パリ）
- 2018 「Yesterday's story」Cité internationale des arts（パリ）
- 2018 「It's soon.」Little barrel（東京）
- 2017 「There is something I want to talk about.」アーク森ビル（東京）  
「Group Show#1 Project Room」Little Barrel（東京）
- 2016 「Call if you notice.」Gallery blanka（愛知）

#### 受賞・奨学金

- 2020 第14回 shiseido art egg 賞、東京
- 2018 パリ賞 Cité internationale des arts 滞在
- 2017 ART IN THE OFFICE 2017、東京
- 2015 武蔵野美術大学 修了制作優秀賞
- 2014 シェル美術賞 木ノ下智恵子審査員賞、東京  
公益財団法人佐藤国際文化育英財団 佐藤美術館第24期奨学生